

シンポジウム1「次世代中医学を目指して：我々は何をすべきなのか？」

第七回（2017年）熊本大会会頭

九州看護福祉大学教授

篠原昭二

「次世代の中医鍼灸を目指して」と置き換えて考えてみたい。

鍼灸臨床の根幹に関わる問題は、経絡弁証であると考えられる。しかし、第7回中医学会（熊本大会：2017年9月16、17日開催）の会頭講演において、『現代における経絡病証の概念（胃経を中心として）』において、本邦における経脈病証が未だに確立されていない現状を紹介した。一方、中国では中医鍼灸において臓腑弁証から経絡弁証の重要性が提起され、種々の検討の成果として、張吉主編の『経脈病候弁証与針灸論治』（人民衛生出版社、2006年刊）が発刊されている。また、中医鍼灸に影響を与える外的要因の一つとして、2019年のWHO総会においてICD-11の改定案が採択され、このなかに初めて「経脈病証」も疾病コードの一部として正式に取り上げられることとなったことである。しかし、この中に収載された経脈病証の内容は、『靈枢』経脈篇(第十二)の是動病、所生病の記述に留まっているという非常にお粗末な現状である。

それでは、今何が必要であるのか？

次世代において不可欠な要素は何かを考えたとき、最初に考慮すべきは、現代にマッチした経脈病証の構築であると思われる。古代の文献を参考にすることも不可欠であるが、今日的な病症の追加や、これまで記述されていなかった症状に対する応用価値なども含めた新たな経脈病証の確立こそが、次世代に引き継いで発展させる原動力となると思われる。